

# 過去の養育態度が高校生の学校適応感に与える影響について

1200550 吉本 慶

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 背景

近年、不登校は年々増加傾向にあり、予防の上では生徒が学校環境において適応感を持つか否かが重要とされ、様々な研究（大久保, 2005; 柴田, 2016）で不登校と学校適応感について述べられている。

文部科学省が発表している「平成 29 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題」では、高等学校における、不登校生徒数は 49,643 人であり、不登校生徒の割合は 1.5% である。これは実際の不登校者の人数であり、不登校傾向すなわち、学校適応感の低い人数はさらに多くなると考えられる。

学校適応感に関する研究はいくつかあるが、両親の養育態度に着目したものも多い。

小学生を対象とした研究には、子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討（姜・酒井, 2006）というものがある。この研究では、「親は悩み事を真剣に聞いてくれる」「親と一緒に喜んだり、悲しんだりしてくれる」など、親が子どもの気持ちや日常の出来事をポジティブに捉えたり受け入れたりする項目で構成された両親の「受容的」な養育態度、「親から約束を守るように言われる」「親から食べ物の好き嫌いをしないように言われる」など、親が子どもに基本的な生活習慣や道徳性を身につけさせる働きかけをする項目で構成された「統制的」な養育態度が影響することが示されている。

中学生を対象とした研究には、親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響（大重・渡辺, 2008）というものがある。この研究では、受容的な養育態度のみ学校適応感に正の影響を及ぼすことが示されている。

また、両親の養育態度に関しては、小学生の向社会

性と親の養育態度（金子・新瀬, 2002）から、両親の養育態度よりも子供の認知する養育態度が子供の向社会性に正の相関があることが示されているように、子供から見た養育態度も重要だと考えられる。

## 目的

高校生の学校適応度に影響を与える要因はいくつかあると思われるが、本研究ではその中でも過去の両親の養育態度がどの程度影響するのかを調査したものである。

高校生の学校適応感と彼らの親の自己評価に基づく親役割行動の関係親役割診断（谷井・上地, 1994）では親役割診断尺度 (Parental Role Assessment Scale) のうち、「今でも子供は学校のことをよく話してくれる」などの項目で構成されている「受容」と「小さい頃から子供の勉強はずっと見てきたし、今でも分かる範囲で見てやりたい」など項目で構成された「適応援助」の親子の情緒的な関係を示す因子項目は適応感に好影響を与え、「子供を褒めるより叱ることの方が多い」などの項目で構成された「干渉」は、やや負の影響を与える場合もあるが、この年齢ではそれ程大きな影響力を持たないという事が示されている。また、この研究では、親子の情緒的な関係で構成された項目を「情緒的支持(愛情または受容)の因子」とし、親が子どもに対して、しつけをしたり、行動を統制する「統制(支配または干渉)の因子」としている。

小学生を対象とした、研究（姜・酒井, 2006）では親が子どもの気持ちや日常の出来事をポジティブに捉えたり受け入れたりする項目で構成された「受容的」な養育態度、親が子どもに基本的な生活習慣や道徳性を身につけさせる働きかけをする項目で構成され

た「統制的」な養育態度と述べている。

そのため、高校生を対象とした研究（谷井・上池, 1994）の研究の一部は養育態度と学校適応感の研究とみなすこともでき、高校生に対しても親の養育態度が学校適応感に影響している可能性が考えられる。

### 仮説

本研究の仮説は、「高校生の学校適応感に対して、小学生時代の養育態度が正の影響を与えている」というものである。

高校生を対象とした研究（谷井・上池, 1994）では「干渉」は、やや負の影響を与える場合もあるが、この年齢ではそれ程大きな影響力を持たないとある。

小学生を対象とした研究（姜・酒井, 2006）では子どもの認知する親の養育態度の第2因子「統制」は、学校適応のすべての因子に有意な正の影響を与える、または正の影響を与える傾向があることが示されている。

この二つの研究から、高校生の時点では現在の養育態度の因子のうち、「統制」があまり影響していなくても、過去の小学生時代の養育態度の因子である「統制」が影響している可能性が考えられる。つまり小学生低学年時代の養育態度が高校生の学校適応感に影響する可能性がある。

### 研究方法

#### 調査対象

本研究では、高知県立高知小津高校の高校生へアンケート調査を二回行った。一回目は高知市小津高校の高校一年生を対象として2018年4月に行い、二回目は一年後に二年生となった同様の人物を対象として2019年4月に行った。回収されたアンケートのうち片方のデータが取得できなかった物は除外した251名を対象に分析し、一部回答に不備がある物は欠損値として扱った。

#### 1 子供の認知する親の養育態度尺度

養育態度尺度（中道, 2013）及び、親の養育態度（中道・中澤, 2003）から、高校生への質問として適さないものを取り除き、因子負荷量が高いものを選別し、使用した。「応答性」「統制」の2因子で構成されてい

る。

また、小学生の向社会性と親の養育態度先行研究（金子・新瀬, 2002）で子供の認知する養育態度も重要と示されていたため、両親ではなく高校生を対象に過去の養育態度を思い出してもらう形で回答させた。（図1より）

あなたが小学生低学年の頃を思い出してください。その頃、あなたが子どもとどのようなコミュニケーションをとっていたのかについて、あなたのご意見をお聞かせください。次に挙げてある質問について、1(ぜんぜんあてはまらない)～4(びつたりあてはまる)の答えの内、あなたに当てはまると思うところを1つ選んで、○をつけてください。		
応答性	あなたが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った 1 時、加わって一緒に遊んだ。	1「ぜんぜんあてはまらない」、 2、3、4「びつたりあてはまる」
	どこかに出かけて、あなたが疲れていると感じた時、 2 休んだり、あなたを抱っこした。	
	あなたを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を 3 示していた。	
	あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、あ 4 なたと一緒に過ごす時間を持っていた。	
統制	家族で遊びに行く時、親の都合だけでなく、できる限 5 りあなたの行きたいところを取り入れた。	
	あなたが自分のやっていることがうまくいかず騒いで 1 いる時、静かにさせた。	
	あなたが自分のやるべきことをやらない時、「やりな 2 さい」と言った。	
	あなたが友達と遊んでいて、友達が使っているオモ 3 チヤを無理矢理取ってしまった時、それを返させた。	
	図書館や映画館など静かにしなければならない場所 4 では、あなたを静かにさせた。	
あなたがあなたと決めた約束を守らない時、その約 5 束をもう一度教えた。		

図1

### 2 学校適応感尺度

学校適応感尺度に関しては、青年の学校への適応感とその規定要因（大久保, 2005）の研究で、学校別に学校生活の要因であるとされている「友人との関係」「教師との関係」「学業」が一様に等しく学校への適応感に対して正の影響を与えている学校はなかったと述べられている。

研究者が設定した基準ではなく、自身が所属する学校環境に合っているのか、という個人に焦点を当てられる、青年の学校への適応感とその規定要因（大久保, 2005）を使用した。

「居心地のよさ感覚」「被信頼感・受容感」「課題・目的的存在」「劣等感のなさ」の4因子で構成された尺度であり、先行研究で中学生を対象とした研究（大重・渡辺, 2008）と同じ尺度で、高校生に対しても妥当性が示されている。

### 結果

#### 因子分析の結果

以降の分析はすべて HAD 用いて行った (清水裕士, 2016)

## 1 子供の認知する親の養育態度の因子構造

養育態度の因子構造を確認するために因子分析を行った結果、先行研究と同じく「応答性」「統制」に分かれた。(Table1) 以降ではこれらの因子の平均値を用いて分析を行った。

項目	Factor1	Factor2	共通性
あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、あなたと一緒に過ごす時間を持っていた。	<b>.828</b>	-.077	.650
あなたを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示していた。	<b>.739</b>	-.068	.517
どこかに出かけて、あなたが疲れていると感じた時、休んだり、あなたを抱っこした。	<b>.736</b>	.024	.555
あなたが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、加わって一緒に遊んだ。	<b>.658</b>	-.029	.421
家族で遊びに行く時、親の都合だけでなく、できる限りあなたの行きたいところを取り入れた。	<b>.428</b>	.151	.249
あなたがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教えた。	.039	<b>.669</b>	.467
図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、あなたを静かにさせた。	.116	<b>.654</b>	.492
あなたが自分のやるべきことをやらない時、「やりなさい」と言った。	-.194	<b>.653</b>	.380
あなたが友達と遊んでいて、友達が使っているおもちゃを無理矢理取ってしまった時、それを返させた。	.158	<b>.590</b>	.435
あなたが自分のやっていることがうまくいかず騒いでいる時、静かにさせた。	-.083	<b>.408</b>	.151

## 2 学校適応度の因子構造

学校適応度の因子構造を確認するために因子分析を行った結果、「居心地のよさ感覚」「被信頼感・受容感」「課題・目的の存在」「劣等感のなさ」に分かれたが、「課題・目的の存在」群の「学校生活は、充実している」「居心地のよさ感覚」群として抽出された。しかし、「課題・目的の存在」群としての因子負荷量も十分高いため、「課題・目的の存在」群とみなして分析した。(Table2 より) 以降ではこれらの因子の平均値を用いて分析を行った。

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
学校において、周りの人と楽しい時間を共有している	<b>.893</b>	.068	-.136	.061	.695
学校において、周りに共感できる	<b>.876</b>	-.035	.041	.033	.748
学校において、リラックスできる	<b>.844</b>	-.115	.083	-.034	.707
学校において、周囲となじめている	<b>.837</b>	.165	-.245	-.038	.704
学校は、自由に話せる雰囲気である	<b>.830</b>	.054	-.091	-.033	.686
学校において、周囲に溶け込んでいる	<b>.820</b>	.151	-.203	-.034	.688
学校において、自分と周りとは、かみ合っている	<b>.789</b>	-.115	.268	.032	.796
学校は、安心する	<b>.784</b>	-.098	.177	-.018	.723
学校において、ありのままの自分を出せている	<b>.768</b>	.175	-.177	-.064	.680
学校において、周りとの助け合っている	<b>.768</b>	-.040	.184	.056	.713
学校において、私は幸せである	<b>.712</b>	-.039	.145	.073	.568
学校生活は、充実している	<b>.438</b>	.099	.368	-.065	.684
学校において、周りから期待されていると感じる	-.084	<b>.928</b>	.052	.015	.801
学校において、周りから必要とされていると感じる	-.005	<b>.908</b>	.058	-.025	.892
学校において、周りから関心をもたれている	.107	<b>.828</b>	-.027	.025	.771
学校において、周りから頼られていると感じる	.061	<b>.771</b>	.085	-.010	.747
学校において、良い評価を受けていると感じる	.027	<b>.606</b>	.137	-.062	.535
学校において、自分の存在を気にかけている	.315	<b>.582</b>	-.001	.046	.648
学校は、将来役に立つことが学べる	-.166	-.066	<b>.907</b>	-.038	.637
学校では、これからの自分のためになることができる	-.022	-.032	<b>.816</b>	-.007	.623
学校において、やるべき目的がある	-.070	.163	<b>.705</b>	-.013	.576
学校において、成長できると感じる	.014	.191	<b>.687</b>	-.006	.661
学校は、好きなことができる	.217	.199	<b>.490</b>	.068	.575
学校には、熱中できるものがある	.189	.153	<b>.457</b>	.074	.448
学校において、自分だけダメだと感じる	.023	-.051	.114	<b>.826</b>	.650
学校において、役に立っていないと感じる	.068	-.196	.046	<b>.792</b>	.695
学校において、周りに迷惑をかけていると感じる	.208	-.070	.036	<b>.720</b>	.440
学校では、嫌われていると感じる	-.192	-.016	.032	<b>.703</b>	.647
学校において、自分が場違いだと感じる	-.120	.142	-.233	<b>.651</b>	.588
学校において、周りから指示や命令をされているように感じる	-.106	.240	-.146	<b>.632</b>	.444

## 仮説検証

### 相関分析の結果

	応答性	統制
居心地のよさ感覚	-.029	.004
課題・目的の存在	-.013	-.050
被信頼感・受容感	-.034	-.061
劣等感のなさ	.033	-.001

それぞれの

学校適応感の四つの因子は子供から見た両親の養育態度の因子である、応答性、統制いずれの因子にも相関が見られなかった。(Table3 より)

そのため、「高校生の学校適応感に対して、過去の養育態度が正の影響を与えている」という仮説は支持されなかった。

### 探索的分析

#### 友人の数

いくつかの研究(大重・渡辺,2008 大久保,2005 など)では友人との関係は、学校への適応感へ影響力をもっていたと述べられており、現在の養育態度に影響を与える因子として友人の数が考えられたため探索的に測定した。

今回の研究と調査内容は異なるが、調査対象及び時期が同じ、高知市小津高校の高校一年生へ2018年4月に実施したアンケート調査より友人数を測定したものを利用した。

#### 友人の数 結果

各年代別の友人数の間のみ相関が見られた。養育態度、学校適応感のいずれの因子も友人数と相関は見られなかった。(Table4 より)

	応答性	統制	小学校の友人数	中学校の友人数	高校の友人数
居心地のよさ感覚	-.029	.004	-.068	-.053	-.096
課題・目的の存在	-.013	-.050	-.059	-.043	-.033
被信頼感・受容感	-.034	-.061	-.033	-.031	-.034
劣等感のなさ	.033	-.001	.084	.057	.117 <sup>+</sup>
小学校の友人数	.146 <sup>*</sup>	.052	1.000		
中学校の友人数	.100	.046	.764 <sup>**</sup>	1.000	
高校の友人数	.155 <sup>*</sup>	.121 <sup>+</sup>	.569 <sup>**</sup>	.610 <sup>**</sup>	1.000

## 考察

本研究では「高校生の学校適応感に対して小学生時代の養育態度が正の影響を与えている」という仮説を検証したが、子どもの認知する両親の養育態度の因子である「応答性」「統制」は子供の学校適応感の因子である「居心地のよさ感覚」「被信頼感・受容感」「課題・目的の存在」「劣等感のなさ」のどの因子に対しても相関が見られなかった。相関が見られなかった要因としていくつかの理由が考えられる。

まず、正確な両親の養育態度が測定できなかった可能性がある。高校一年生から5年以上前である小学校低学年時代を思い出すことが難しく、過去の養育態度を上手く思い出せなかったと推測できる。

次に、学校適応感が低い人たちのデータが測定できていなかった可能性がある。文部科学省が発表している「平成29年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題」に関する調査結果では、中学校の不登校生徒の割合は3.2%だが、高校は義務教育でなく、高校生の不登校生徒の割合は1.5%と中学生とくらべて低下しており学校適応度が低い群が進学していなかったためデータを測定できなかったと推測できる。また、高知県が公表している「平成30年度学校基本調査報告書」では高知県の高等学校等進学率は98.6%で、全国平均(98.8%)を0.2ポイント下回っており、本研究の調査対象の高校は高知県の中では進学校であるため学校適応感が低い者は該当高校へ進学せずに、違う高校へ進学する可能性もあるためデータを測定できなかった可能性がある。

さらに、使用している学校適応感尺度が異なり、過去の養育態度を高校生側から測定したため高校生を対象とした研究(谷井・上地,1994)と異なる結果になったと考えられる。そのため、今回の研究で使用した学校適応感尺度を使用して現在の養育態度を測定する必要と、高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係(谷井・上地,1994)と同じ学校適応感尺度を利用して過去の養育態度を測定する必要がある。

#### 友人の数の考察

現在の養育態度に影響を与える因子として友人の数が考えられ、探索的に測定したが相関が見られなかった。

その要因として、高校一年を対象として、4月に実施しているため、高校に入学してまだ時間が経過していないので、中学生の時の友人が同じ高校へ進学している場合の友人数など正確に友人数を測定できていなかったと推測できる。

また、いくつかの研究（大重・渡辺, 2008; 大久保, 2005）で友人との関係性が学校適応感に影響していると述べられているが、友人の数については言及していないため学校適応感に影響していなかった可能性がある。

### 参考文献

- 大重啓・渡辺弥生（2008）親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響 教心 第50回総会（臨床,ポスター発表D）
- 姜信善・酒井えりか（2006）子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討 人間発達科学部紀要, 1, 111-119
- 谷井淳一・上地安昭（1994）高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 *Japanese Journal of Educational Psychology*, 42, 185-192
- 大久保智生（2005）青年の学校への適応感とその規定要因 教育心理学研究, 53, 307-319
- 松寄くみ子・奥田奈津子・下村麻衣・高橋美久・山口豊一（2016）小学生版学校適応感尺度の作成 跡見学園女子大学文学部紀要, 51, A111 - A118
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
- 金子劭榮・新瀬和夫（2002）小学生の向社会性と親の養育態度 金沢大学教育学部紀要.教育科学編 51, 145-158
- 中道圭人（2013）父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学編） 第63号 109-121
- 中道圭人・中澤潤（2003）父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 173-179
- 清水裕士（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.